

(別添資料)

令和7年度

枚方市教育委員会視察

令和7年(2025年) 11月12・13日

神奈川県 相模原市

神奈川県 鎌倉市

目次

1.神奈川県 相模原市

- ・ 生成AIを活用した授業実践 (相模原市立中野中学校)
- ・ 教育ICTの活用、ダッシュボードについて (相模原市教育委員会)

2.神奈川県 鎌倉市

- ・ スクールコラボファンドについて (鎌倉市教育委員会)
- ・ 学びの多様化学校について (鎌倉市立由比ガ浜中学校)

神奈川県 相模原市

人口

- ✔ 約721,800人
- ✔ 児童数（小学校）：約35,100人
- ✔ 生徒数（中学校）：約17,500人

教育

- ✔ 市立小学校数：68校
- ✔ 市立中学校数：34校
- ✔ 教職員数：小・中学校合計 約6,000人
- ✔ 教育目標

「共に認め合い、現在と未来を創る人」



相模原市立中野中学校

1年生：88人・2年生：83人・3年生：88人
通常学級：9学級・特別支援学級：3学級

■ 相模原市立中野中学校における生成AI活用授業の概要

背景・経緯

- ✓ 文部科学省「リーディングDXスクール事業」指定校
- ✓ 令和5年度「生成AIパイロット校」として実践開始

目的

- ✓ 主体的・対話的で深い学びの実現
情報活用能力の育成

生成AI活用における課題感

- ・ 2割の生徒が「プロンプトが難しい」「回答が複雑すぎる」と感じている
- ・ 教員も授業での具体的な活用法に課題



「とにかく使ってみる」段階から
「何のために使うのか」への移行

**6カテゴリーの場面設定
プロンプトテンプレートの作成**

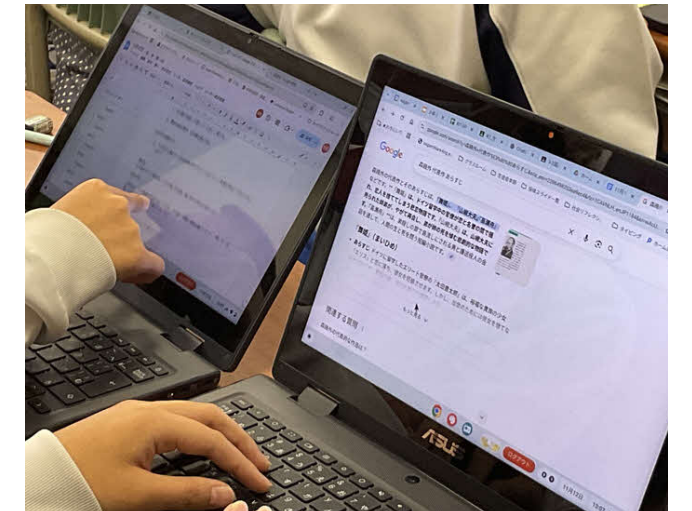
生成AIを活用する6カテゴリーの場面と目的・教師の留意点

カテゴリー	活用場面	教師の留意点
A. 課題解決・対話的学習	自分の課題（考えや意見）に対し、解決策を探すためにChatGPTにアドバイスを求める。対話を通じて課題を深掘りし、ディベートやディスカッションの仮想相手として活用することで、自分の考えを整理し発展させる。	ChatGPTへの問いかけは補助的な役割にとどめ、生徒が自分で批判的に考え、議論を深めることを促していく。
B. 多面的な見方 多角的な考え方	他者のレポートや自分のレポートをChatGPTに比較させ、共通点や相違点を発見する。また、教師の示した資料や教科書などの内容と自分の考えを読み合わせ、断片的なそれぞれの情報を組み立てる。（構造化）	「なぜ、多様な視点や考え方が必要なのか」を考えさせることが重要である。その過程で価値観を深め、物事を見る視野を広げる力を育ませることを大切にする。
C. メタ認知	振り返りシートや学習カードに記録した内容をChatGPTに読み込ませ、「何ができるようになったか」や「どの部分がまだ課題か」を整理する。	「めあて」や「ゴール」を意識させ、生徒が自分自身で「達成したこと」や「今後の課題」を主体的に振り返る手助けを行う。
D. 個別最適化	自分の学びに合わせてChatGPTに問題を出題させ、それを解くことで知識や理解を深める。また、自分の得意や苦手を把握しながら学習を進めることができるようにする。	生徒が根拠を持って答えを導き出せるよう工夫する必要がある。解答後には「なぜそうなるのか」を振り返らせ、学んだ内容を確実に理解させる。
E. 語彙力・表現力育成	言葉の言い回しや表現方法のバリエーションをたずねる。同じ内容を異なる言い方で表現する練習を通じて、語彙力や文章力を高める。難しい表現については、具体例を挙げて説明できるようにする。	生徒自身の言葉で要約させたり、アウトプット（コミュニケーション）させたりすることで、表現のニュアンスを理解させる必要がある。
F. 文章添削・評価	英作文や感想文、レポートをChatGPTに添削してもらおう。さらに、評価の観点を具体的に示してもらうことで、自分自身で良い部分や改善点を把握できるようにし、向上目標をもつ。	ChatGPTの添削を参考にしつつ、最終的な評価は教師が行い、生徒が自らの進歩を確認できるように導く。

主体的・対話的で深い学びの実現をめざした 生成AIの授業活用

活用の目的（6カテゴリー）

1. 課題解決・対話的学習
2. 多面的な見方・考え方
3. メタ認知
4. 個別最適化
5. 語彙力・表現力育成
6. 文章添削・評価



成果

- 生徒の思考時間が増加
- 対話活動の活性化（仲間＋AIとの協働）
- テスト等での無解答率の低減
- 活用する場面や目的を意識、活用の幅が拡大

教育的効果

- 深い学びの実現：問いを立てる力、説明する力、
協働する力
- 情報活用能力の育成：AIリテラシー、情報モラル
- 個別最適化学習：学習者のペースに応じた支援
- メタ認知の強化：学び方を選び取る

相模原市教育委員会

■ 学校情報化の「3つの視点」

- **情報活用能力の育成**

プログラミング的思考、ICT操作スキル、情報セキュリティ・情報モラル教育など。

- **ICTを活用した授業改善**

全教科でICTを活かした授業スタイルの定着を目指す。

- **校務の情報化**

校内・学校間の情報共有の促進、教職員の業務効率化、事務のデジタル化。

■ 特徴のポイント

- 端末やネットワーク整備だけでなく、「子どもの情報活用能力」「教員のICT活用力」「校務の効率化」を含めた総合的な取組。
- 情報モラル・セキュリティにも配慮。
- 学年や教科ごとにICTスキルや活用方法を明示する、体系的・計画的なアプローチ。

相模原市教育委員会

ダッシュボード／データ活用の仕組み

デジタル教科書の書き込み・振り返りシートなどを「学習データ」として蓄積 → 生徒の学びを可視化・分析できるように。これが、指導改善や学習支援につながる。

校務の情報化と教職員の働き方支援

「校務支援システム」導入による、校務の情報化・教職員の業務効率化を図る。
校務支援システムの研修を年間約6回オンラインで実施。また、学校からの要望によるシステム改修も行われている。

教育委員会レベルでのデータ活用による可能性

行政のデータと教育データを掛け合わせると、不登校やヤングケアラーなど子どもの困り感の「予兆のもう一つ前段階」に気づける。
教員が気づきにくい、成績ではわからない子どものつまづきに気付ける。

相模原市教育委員会

情報リテラシー教育

「ネットパトロールだより」

子どもの日常生活でよく見られる問題点に気づき、解決していくストーリー仕立て
→危険性を一方的に伝達するものではなく、自分事として捉えられるものに。

メタバース空間における体験学習

令和8年度に市の自然体験教室を再現したバーチャル空間を構築予定。（5,000万円）
学習を全面に出しすぎない「楽しい、また来たい」と思える場。

不登校児童生徒に限らず、全児童生徒が使う「リアル体験学習とつながる空間」

→事前事後学習としての活用

不登校児童生徒もバーチャル空間・アバターだから参加しやすい

「おもしろそうだから、入ってみようかな」が次の学びや体験につながる

神奈川県 鎌倉市

人口

- ✓ 約169,530人
- ✓ 児童数（小学校）：7,128人
- ✓ 生徒数（中学校）：3,390人

教育

- ✓ 市立小学校数：16校
- ✓ 市立中学校数：10校
- ✓ 教職員数：小・中学校合計 約1,000人
- ✓ 教育目標

「自ら学び、共に生きる子どもの育成」



鎌倉市教育委員会

■めざす姿（ビジョン）

“炭火”のごとく誰もが学びの火を灯し続け、生涯にわたり心豊かに生きられるまち鎌倉

鎌倉市は、①“個の多様性”を前提としながら、②自ら学びを“自己決定”するとともに、③学びに向かうための“巧妙な環境設計”の視点を持って教育政策を推進します。

“炭火”のような学習者へ…

Ⅰ “個の多様性”の視点

学習者は多様であることを
前提とした学びとなっているか？



Ⅱ “自己決定”の視点

学習者が主体的に自らの
学びをデザインできているか？

“学習者中心の学び”

Ⅲ “巧妙な環境設計”の視点

安心してワクワクする学びに向かえる
環境設計ができているか？

鎌倉スクールラボファンド

■ 目的

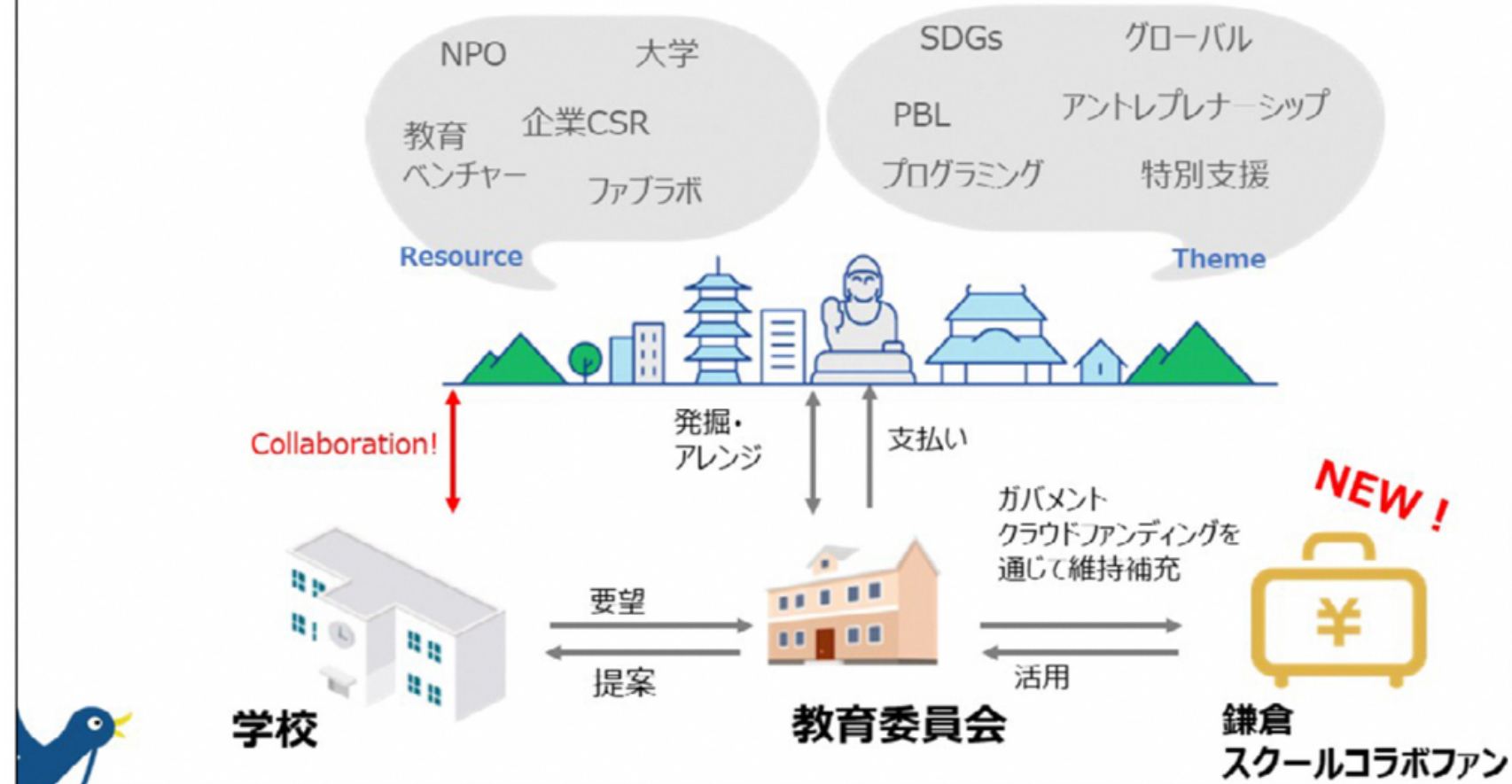
- AI・ICT 時代に対応した「社会につながる学び」を実現
- 学校だけでは難しい“専門性のある学び”を、地域・企業・NPO・大学と協働して提供
- 子どもたちが「興味関心 × 社会課題」を軸に学ぶ機会を保障

「未来にワクワクできる教育」
「社会につながる学び」

■ 仕組・内容

- 学校（市立小中学校）が主体となり、NPO、企業、大学、地域団体など“多様な人材や組織”と協働する教育活動を支えるための資金。
- 活用される学びの内容例：プロジェクト型学習、プログラミング学習、ICTを活用した個別最適学習、社会課題探究、文化・芸術・伝統体験、地域・環境学習、職業体験など。

社会に開かれた教育課程の実装に向けて スクールコラボファンド後の世界



資金調達方法

- ・ガバメントクラウドファンディング（ふるさと納税活用）
- ・活用基金（令和6年4月設置）による通年寄附受付
- ・寄附型自動販売機（市内12台設置）
- ・「キモチと。」プログラム（不要本・CD等の寄附）
- ・SCF+：金融商品の運用益を活用（現在受付終了）

これまでは、財政制約により、
学校単独では新しい学びの実現が困難
↓
学校主体で外部人材と協働する
「社会に開かれた教育課程」の実現



鎌倉市立由比ガ浜中学校

■設置形態（文科省指定「学びの多様化学校」）

- 公立中学校（御成中学校の分校型）
- 令和7年4月開校
- 全市域対象／定員約30名（各学年10名程度）
- 県費負担教員：17名（9教科）



■スクールビジョン

「自分らしく学び、自分らしく成長できる学校」

- 一般の中学校より授業時数を減らし、自分のペースで学べる柔軟な教育課程編成
- 「かまくらULTLAプログラム」の要素を取り入れた総合的な学習の時間の設定



縦割りのホームグループ

全校生徒を10名程度ずつの異学年の「ホームグループ」に分けます。朝のホームルームや帰りのホームルーム、学活の授業など、学校生活の様々な場面をホームグループで過ごすことで、学年ごとの横のつながりとともに学年を超えた縦のつながりも深め、社会性や協調性を育みます。各ホームグループには複数の担当スタッフがつき、生徒や家庭との連絡・相談の窓口となります。

授業時数

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術 家庭	外国語	道徳	特活	総合	ULTLA	CTime	合計
由比ガ浜中学校	88	53	105	52	0	0	70	0	87	35	35	0	140	105	770
(参考) 標準1年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	35	50			1015
(参考) 標準2年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	35	70			1015
(参考) 標準3年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	35	70			1015

1日の流れ(イメージ)

～9:30 登校

登校したら上ばきにはき替え、「つどいスペース(仮称)」へ行きます。つどいスペースには「ソファでくつろげるスペース」「個別学習スペース」「図書コーナー」など様々な居場所があり、自分の好きな場所で朝のホームルームまでの時間を過ごします。また、今日の「ここからからだの状態」を見つめiPadに入力します。

9:30 朝のホームルーム

朝のホームルームは全員でつどいスペースで行います。「1日の予定の確認」等のあと、ホームグループごとに「健康観察」「貴重品の回収」「担当スタッフからのメッセージ」等で1日をスタートします。

9:40 EL(20分授業)

最初の授業はELです。ELの時間は、iPadを使った個別学習が中心になりますので、自分のペースで1日の学習を始めることができます。

10:10 1校時～2校時(50分授業)

授業は「習熟度別」「学年別」「異学年」「個別」「全員」など多様なスタイルで行います。

12:00 昼食・昼休み

昼食は、デリバリー式給食です(持参したお弁当も可)。つどいスペースや教室、天気の良い日は外の芝生など好きな場所で楽しく食べましょう。昼食後は多目的スペースで軽い運動をしたり、つどいスペースで友だちやスタッフとおしゃべりしたり、読書したりとリラックスして過ごします。

13:00 3校時～4校時(50分授業)

午後は主に「ULTLA」や「CTime」の授業です。地域の方など色々な人たちと関わりながら教科の枠を超えて探究的に学んだり、自分の興味関心に合わせて自分なりの目標をもって深く学んだりします。

14:50 帰りのホームルーム・チャット・清掃

ホームグループごとの帰りのホームルームでは「次の日の予定の確認」「貴重品返却」等を行います。その後、それぞれ担当スタッフとチャット(簡単な面談)を行い1日を振り返ります。

15:05 下校

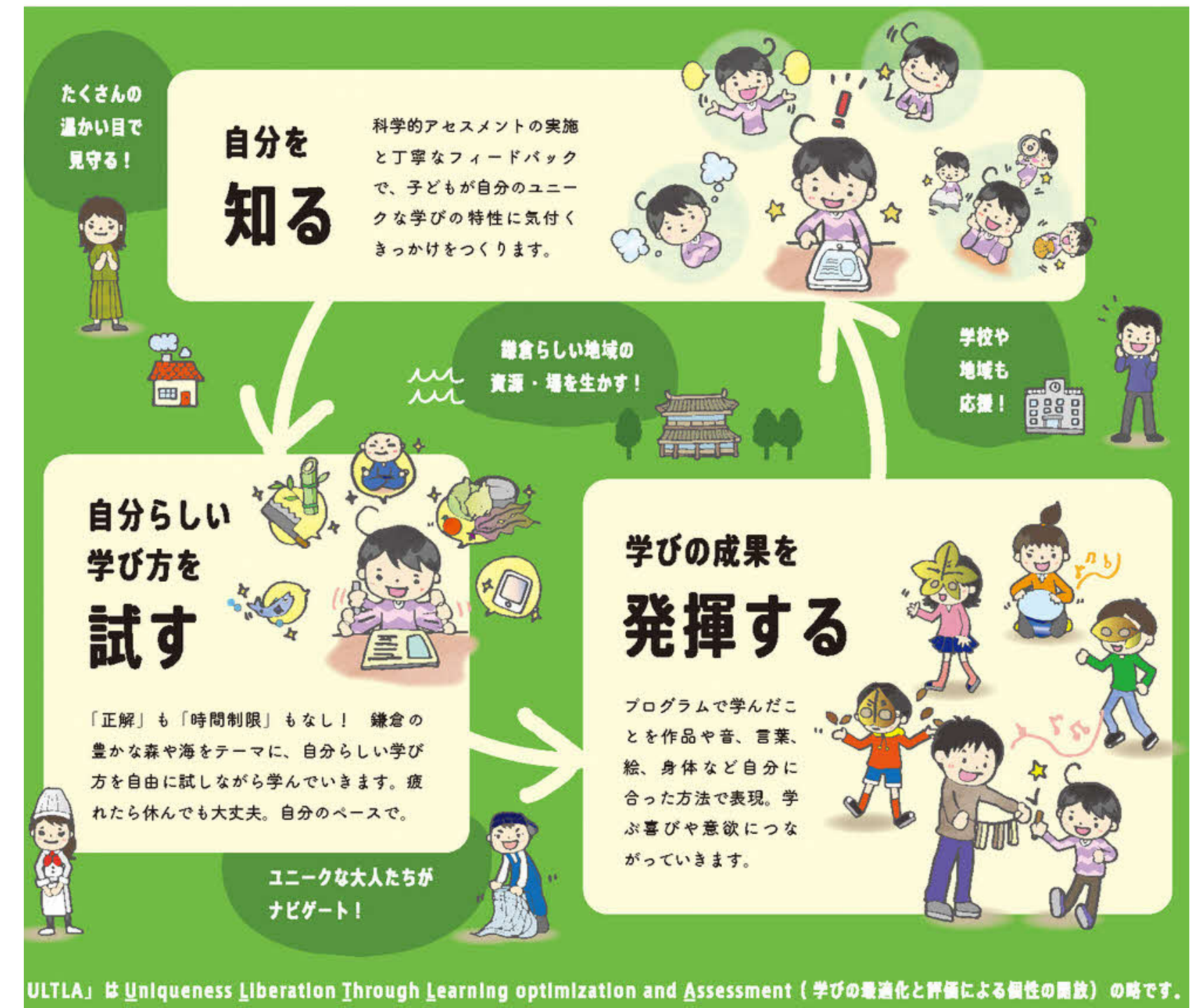
下校時刻後もつどいスペース等で学習したり、スタッフとおしゃべりしたりして過ごすことが可能です。最終下校は16:00です。



かまくらULTLAプログラム

- 当初は不登校・休みがちの児童生徒を対象とした3日間の体験型プログラムとして、鎌倉市教育委員会と外部パートナーが実施していた。
- ULTLAでは、児童生徒一人ひとりの「興味・関心」「思考スタイル」「認知特性」などをアセスメントし、それを踏まえた「自分に合った学び方」を選び、教科横断・探究的な学びを行う。地域の自然・文化・人々と関わる体験型学びが中心。

「別の学び方」があるという安心感
不登校の多様な背景に対応できる柔軟な教育設計
子どもが自己肯定感の回復
学校・地域・支援団体を結ぶ拠点校としての役割
→“学びを取り戻すプログラム”として
不登校施策と親和性が高く、効果が見られる。



保護者・生徒の思いを大切にした学校運営

「マイフェス」

自分の「得意」を他者と共有

「教科ULTLAによる体験学習」

地域や多様な大人との関わりによる社会性の育成

「生徒の意見を尊重する取組」

委員会や部活など、学校で一般的な活動にも、
生徒との対話から形を作っていく。

＊登校率：81％

＊教室へ入れる、授業を受けられるといった、
「小さな第一歩」を保護者と子どもで共有
できる。

＊生徒たちが「ありのまま」を受け入れられ、
安心して学び、自らの興味・関心を大切にし
ながら成長できる場

保護者との連携

「保護者の理解と合意」「保護者の不安や希望の聴取」重視。
単なる受け入れではなく「共に創る学校」という姿勢
相談体制の充実と合わせて、「保護者同士のつながりづくり」
（保護者に、「スタッフへの支援体制の充実」を依頼）
→保護者が中心となり結成した「由比中サポーターズ」
保護者同士・教員の懇談「由比サポサロン」を毎月開催

